

【一】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「おい、末永。早く来いよ」

ぼくがみんなの輪にはいりかけたときに武藤がどなって、ふりかえると末永が昇降口から出てきたところだった。長髪を、トレッドマークのヘアバンドでまとめた末永が、長い手足をふって一気に迫ってくる。

「太二、パーな」

武藤は小声で言うと、そっぽをむいた。いままで一度もなかったことだが、みんながなにをしようとしているのかはわかった。「A」ということばが口から出かかったときに末永が到着した。

「悪い悪い。給食のあと、腹が痛くなつてさ」とおくれた言いわけをする末永を尻目に、「グーパー、じゃん」とみんなが声をだした。

「あつ」

自分だけがグートだとわかり、末永がしゃがみこんだ。うなだれた顔にかかった髪の毛のすきまから、とがらせた口が見えた。

「すげえ偶然だな。おい、末永。手伝ってやりたいのは山々だけど、よけいなことをしたら先輩たちに怒られるからよ」

武藤は早口で言うと、「B」というように右腕をふった。ぼくは残つて末永と一緒にブラシをかけるようかと思つたが、久保に肩をたたかれて、みんなにまぎって小走りでコウシヤにもどつた。

たまたま末永がおくれたのかこつて、武藤がワナをしかけたのだ。もしも末永と同時に到着していたら、ぼくもグーをだしていたかもしれない。ぎりぎりセーフと I するのと同時に、末永がキャプテンの中田さんか顧問の浅井先生にこのことを訴えたいへんだと不安がよぎつた。

中田さんはふだんはおだやかだが、一度怒ると簡単には相手を許さなかつた。夏休みの練習で、数人の二年生が日かげでサボっていたときには、「C」と二年生全員で二百回素振りをした。あらかじめ注意されていたのに、末永ひとりをはめたことがばれたら、どんな罰を与えられるかわからない。

こんなことなら武藤の言いなりになるんじゃないかと、ぼくは II していた。でも、聞こえなかつたふりをしてグーをだしていたとしても、「D」と、みんなのハンカンを買っていただろう。

久保が武藤についたのも、ぼくにはショックだった。久保は小学校一年生からの友だちで、超がつくほどまじめなやつだ。そのぶんかけひきがへたで、肝心なところで相手に裏をつかれる。グーパーじゃんけんでもよく負けて、三回に二回はコート整備をしていた。だから、というわけでもないが、ぼくは久保ならこういうときは絶対にとめるだろうとおもっていた。

武藤と末永はブレイクスタイルがよく似ていた。二人とも百七十五センチをこえる長身で、威力のあるサーブ&ボレーを武器にしている。ツポにはまると手をつけられないが、ベースラインでの打ちあいをやや苦手にして、自分のイージーミスから崩れることが多いところまでそっくりだった。

ただし、武藤が練習ネットンなものに対して、末永はすぐに手をぬこうとする。筋トレのときに、末永がまじめにやらなかつたせいで、スクワットや腕立て伏せの回数を増やされたことも一度や二度ではなかつた。だから、武藤が中心になってハメたのはたしかに行きすぎだが、末永にまったくヒがないわけではなかつた。

そうはいつても、ひとりで四面のコートにブラシをかけるのはたいへ

んだ。末永の性格からすると、途中で投げださないとかがらない。それをきっかけに末永が退部したら、後味の悪いことになってしまう。

昼休みのおわり近くに、四階の教室の窓からグラウンドに目をやると、末永はまだブラシをかけていた。かなりがんばったようで、残りは半面だったが、そこで昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴りだした。両手にブラシを持った末永は前かがみになって最後の力をふりしぼり、コートの上にたどり着くなり地面にひざをついた。

末永は放課後の練習にいつもどおりサンカしたので、ほくは胸をなでおろした。今回は大ごとにならずにすんだが、昼休みのグーパーじゃけんがあるかぎり、こうした問題はくりかえされるのだとおもうと気が重かった。なにより、武藤の言いなりになってしまった自分が情けなかつた。練習にも集中できず、ほくはどうすればいいのかを考えながら家までの道のりを歩いた。

(中略)

朝練では、一年生対二年生の対抗戦をする。シングルマッチで一ゲームを取ったほうの勝ち。四面のコートに分かれて、合計二十四試合をして、白星の多い学年はそのままコートで練習をつづける。負けた学年は球拾いと声だしにまわる。

力試しにはもってこいだが、二年生との実力差は大きくて、これまで一年生が勝ち越したことはなかった。武藤や末永でも三回に一回勝てるかどうかで、久保は一度も勝つたことがない。ほくは勝率五割をキープしていたが、団体戦に出場するレギュラークラスには a が立たなかつた。ただし、一度だけ中田さんから金星をあげたことがある。ペーラインでの打ちあいに持ちこんで、ねばりにねばって長いラリーをものにした。誰が相手であれ、きのうからのモヤモヤを吹き払うためにも、

広がっていたはずだ。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがないのも事実だつた。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。もしかすると、きのうのしかえしに、末永がなにかしなかけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしでもうしあわせていたとえ負けてもひとりにはならないように安全策をこうじているのかもしれない。

ウラでうちあわせ可能な手口がづぎ頭にかび、これはおもっている以上に厄介だと、ほくは頭を悩ませた。

やはりキャプテンの中田さんに助けをもらうしかない。そうおもったが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きつい思いをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいつているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだつた。おかげで授業はまるで頭にはいつていなかったが、ほくはようやく自分のすべきことがわかつた気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下に出ると、武藤が顔をうつむかせてこつちに歩いてくる。

「よお」

「おっ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔をかべた。そんな姿を見たことがな

ほくはどうしても勝ちたかつた。

ところが、やる気とはうらはらに、ほくは一ポイントも取れずに負けしまった。武藤や末永もサーブがまるで決まらず、ダブルフォールトを連発して自滅。久保も、ほかの一年生たちも、bもcも出ないまま二年生にうち負かされて、これまでにない早さで勝負がついた。

「どうした一年。だらしがねえぞ」

キャプテンの中田さんに命じられて、ほくたちはグラウンドを走らされた。いつも先頭をきつているので、みんなの姿を見ずに走るのはなれていたが、今日だけは武藤や末永や久保がどんな顔でついてきているのか、気になってしかたがなかつた。

誰もが、きのう末永をハメたことを後悔しているのだ。足を止めて、一年生全員で話しあいをして、昼休みのコート整備を当番制にかえても、らうようにキャプテンに頼もうと言いたかつたが、おもいきれないまま、ほくはグラウンドを走りつづけた。

「よし、ラスト一周。ダッシュでまわってこい」

中田さんの声を合図に全力疾走となり、ほくは最後まで先頭を守つた。「ボールはかたづけておいたからな。昼休みのコート整備はちゃんとやれよ」

八時二十分をすぎたので、ネットのむこうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、まちがっても今日はやるなよと釘を刺しておきたかつたが、息が切れて、とても口をきくどころではなかつた。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、ほくは武藤と話さなくてよかつたと思つた。ほくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はほくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかつたにちがいない。武藤ではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が

かつたので、もしかすると自分から顧問の浅井先生かキャプテンの中田さんにうちあけたのではないかと、ほくはおもつた。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートに来るはずだ。たつぷり怒られるだろうが、それでケリがつくならかまわなかつた。給食の時間がおわり、ほくはテニスコートにむかつた。しかし集まつたのは一年生だけだつた。ほくは落胆すると同時に自分の甘さに腹が立つた。

いつものように二十四人で輪をつくつたが、誰の顔も緊張で青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた。いまさらながら、ほくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況で、きのうはハメて悪かつた末永にあやまつたら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よけいなことを言いやがつてとらまれて、末永だつて怒りのやり場にこまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふつうにグーパーじゃけんをすることだつた。うまく分かれてくれればいいが、偶然、グーかパーがひとりになる可能性だつてある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて收拾がつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ほくの頭に父の姿がかんた。一緒にテニススクールに通っていたころ、父は試合で会心のショットを決めると、応援しているほくたちにむかつてポーズをとつた。ほくや母も、同じポーズで父にこたえた。

⑨「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろした。ほくはチョコキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョコキにしか見えない。ほく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ほくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があつた。

「太二、わかつたよ。おれもチョコキにするわ」

久保はそう言ってグーからチョコキにかえると、とがらせた口から息を吐いた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるを隠すように口をむすび、すばやくうなずいた。そして、武藤は握っていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ほくに向かってその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ほくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョコキにかえて、輪の中にさしだした。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もなしし、今日はチョコキがブラシをかけるよ」

そう言って、ほくが道具小屋にはいると、何人かの足音が近づいた。ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人が歩いてきて、ほくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかつた。ほくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離れないように歩幅をあわせて歩いていく。きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は大腿でブラシを

引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅を狭くしてきれいな弧を描き、直線にもどれば二人ともがまた大腿になってブラシを引いていく。

ほくたちはこれまでよりも強くなるだろう。チーム全体としても、もつともつと強くなれるはずだ。

(中略)

さらに、このコートで家族四人でテニスをしたいと思い、押入れにしまつてある四本のラケットのことを考えた。ほくはブラシを引きながら、胸のなかで父と母と姉にむかつてVサインを送った。

(佐川光晴「大きくなる日」より)

問一 線部①について、漢字の部分はひらがなに、カタカナの部分は漢字に直しなさい。

問二 「A」 「D」 に入る表現として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア さあ行こうぜ
- イ 自分だけいい子になりやがって
- ウ 自分もいっしょにやるから
- エ やめたほうがいいよ

問三 線部「かこつけて」の文章中での意味として最も適当なものを選択し、記号で答えなさい。

- ア 知らんぷりして
- イ からかって
- ウ たくらんで
- エ 口実にして

問四 線部①、②に入る最も適当な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 期待
 - イ 激怒
 - ウ 安堵
 - エ 後悔
- 線部①「みんながなにをしようとしているのかはわかっただ。」とありますが、みんなはなにをしようとしていたのですか。次の□に入る言葉を、それぞれ指定された字数で文中から抜き出して答えなさい。

グーパーじゃんけんで ア(二字) だけに イ(二字) を出させて、 ウ(五字) を一人でさせようとしていた。

問六 線部②「久保が武藤についたのも、ほくにはシヨックだった。」とありますが、なぜ久保が武藤につくとシヨックなのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 人をだますことなどしない性格なのに、武藤の悪だくみに乗っていたから。
- イ やさしくて友達思いなのに、ずっと仲良しだったほくをだましたから。
- ウ とても正義感が強いのに、クラブの中でも特に不真面目な部員とかがけで仲良くしていたから。
- エ いつもおだやかでのんびりしているのに、中心になって他の部員に嫌がらせをしたから。

問七 線部③「末永の性格」とありますが、ここでは彼のどのような性格をさしていますか。文章中のこれよりも前の部分から「性格」に続くように十一字で抜き出して答えなさい。

線部④「今回は大ごとにならずにすんだ」とありますが、ほくが考える「大ごと」は誰がどうすることですか。十字以内で答えなさい。

問八 線部⑤「疑いだせばきりがなし」という意味になるよう、次の□に漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

疑 □ □ 鬼

問九 線部⑥「自分のすべきこと」とはどのようなことですか。二十字以上三十字以内で答えなさい。

問十 線部⑦「疑いだせばきりがなし」という意味になるよう、次の□に漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

疑 □ □ 鬼

問十一 線部⑧「自分のすべきこと」とはどのようなことですか。二十字以上三十字以内で答えなさい。

問十二 線部⑨「自分のすべきこと」とはどのようなことですか。二十字以上三十字以内で答えなさい。

問い十二 — 線部⑦「自分の甘さ」とありますが、どのようなことを指して甘いといっているのですか。三十文字以上四十文字以内で説明しなさい。

問い十三 — 線部⑧「ポーズをとった。」とありますが、どのようなポーズですか。文章中から四字で抜き出して答えなさい。

問い十四 — 線部⑨「グーパー、じゃん」よりあとの文章から、部員たちのどのような気持ちを読み取れますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 今日も打ち合わせ通りのじゃんけんをするのが楽しい。
- イ 自分だけはしんどい思いをする立場に立ちたくない。
- ウ 特定の部員に仕事をさせようとしたが失敗して悔しい。
- エ 一人をおとしられるようなことはもうしたくない。

問い十五 — 線部⑩「胸のなかで父と母と姉にむかってVサインを送った。」とありますが、この時の「ほく」の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のおかげでチームメイトが苦しみから救われたことをとても誇らしく思い、家族に自慢したい気持ち。
- イ チームがまとまったことをうれしく思い、自分が行動を起こすきっかけをくれた家族に喜びを伝えたい気持ち。
- ウ 自分が立派にテニス部の一員としてがんばっていることに優越感をいだき、家族を見返してやろうという気持ち。
- エ ささいなことで大きくもめる部員とのつきあいに疲れ、これからは家族とのテニスに専念することを誓う気持ち。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 科学的な系統分類によると、クジラは哺乳類である。正確にいうと、哺乳綱に属する動物ということになる。そして、クジラのなかまはクジラ目というグループにはいる。クジラ以外に、海にすむ哺乳類には、ジュゴンやマナティーなどのカイギュウ目、ラッコやカワウソなどのネコ目、オットセイ、トド、アシカなどのアザラシ目がある。ヒトは、サル目にふくまれる動物である。

2 クジラがヒトとおなじような哺乳類であるとすると、クジラとヒトはそれなりに似かよった面をもっていることになる。A、魚であるとする、クジラと魚も似たところがあるはずだ。

3 それではヒトや魚はクジラとどのような点が似ており、どのような点がちがっているのだろうか。

4 B 哺乳類ということばからも想像できるように、クジラはこどもをうむ。魚のおおぐが卵をうむのとはたいへんにちがう。そして、クジラは母乳でこどもをそだてる。一回のシュツサンでうまれる子クジラの数は、たいていの場合、一頭である。これもヒトの場合とよく似ている。

5 魚はえらから水にとけた酸素を体内に入れる。しかし、クジラはヒトとおなじように空気中の酸素を鼻からとり入れる。だから、クジラが海中にずっともぐって①いて、②気まぐれに海面にすがたをみせるとか③んがえるのは正しくない。

6 クジラは空気をすうために海面にうきあがって、鼻から呼吸する。その鼻は口の上というよりも、頭の上についている。C、クジラはその鼻から潮をふく。

7 この潮ふきは、口のなかにたまった潮水を鼻からふきだしているかのようにみえる。じつはこれは、呼吸をする際にはく息にほかならない。この息はふつう噴気とよばれている。

8 噴気の形は、クジラの種類によつてちがう。まっすぐ上にいきおいよくふきあげるもの、前方四五度にふきあげるもの、噴気が二本にわかれるもの、といったようなちがいがあある。じつさいは噴気の形からクジラの種類をみわけるのはむづかしいようだ。二本にわかれる噴気をクジラの絵でよくみるが、あれはクジラの種類でいうと、ふつうセミクジラのものである。

9 クジラの外形や内部の形態をみると、クジラが魚とちがう点があはつきりとする。クジラには、魚とちがってウロコがない。かといって、陸上の哺乳類のように体毛があるわけではない。魚の場合とおなじように、水中では体毛が④オンド調節の役にはたさない。体毛は「X」したのである。

10 かつて、クジラはラクダとおなじように、陸をあるいていた痕跡がある。前びれはもともど手であつたし、前びれの骨は肩の骨に連結している。脚は、水中生活に適応して退化したが、骨のあとがのこっている。最近、五二〇〇万年前のクジラの化石がバキスタンでみつかった。

11 いっぽうクジラは、水中でおよぐという移動方法をとるのに適応して、魚とおなじように尾びれがたいへんに発達している。D、尾のつきかたは魚と決定的にちがう。クジラの尾は、魚の場合とことなつて水平についている。これは水中から水面に浮上するさいに、上むきの推進力をつけるためのもつとも適したコウゾウとされている。水族館でイルカやシャチの水中でのうごきをみた人なら、④独特の尾び

れのうごかしかたをごぞんじだろう。人間も水泳にイルカのおよぎかたをとり入れた。バタフライにおけるドルフィン・キックとよばれる脚のうごかしかたがそうだ。

12 クジラはどのような器官をつかってまわりの環境からいろいろな情報を与えるのだろうか。これまでの研究から、水中に生きるクジラ類は、

I がたいへん発達しているということがわかっている。とくに

クジラのなかで、歯クジラのなかまは、みずから音を外界に発し、前方にある物体にその音があたつて反射する反響音から、物体までの距離、物体の形やおおきさ、その他の特徴をすることができるとい

13 クジラは、I 能力がたいへん発達しているいっぽう、ほかの感覚器官はそれほど機能しているのではない。たとえば、II

I にくらべて、クジラの生活にとって必要性があまりない。

水中では太陽光線がとどく範囲はかぎられており、数百メートル以上のふかさにもぐつて食べものをさがすクジラの場合、II が重要であるとおもわれぬ。もつとも、まったくII が重要ではないとい

うのではなく、水面で周囲の環境をしり、なかまの存在を確認するうえで役だっている。においをかいでしらべるIII は、ほとんどあるいはまったく未発達である。やはりこの場合も、外界から情報をえるさいに、III よりもI にたよっていると

いってよい。

14 クジラはふつう水面から数百メートルのふかさまでもぐるることができる。種類によつてことなるが、水面ちかくで食べものをとるひげクジラの種類や小型のイルカでも数十メートルはもぐるし、マッコウクジラとなると一〇〇メートル以上もふかく海にもぐるこ

る。

15 ヒトの場合、水中にもぐると水圧のためにからだ全体が圧力をうける。すると空気をつまった肺はつぶれてしまい、空気中の窒素が気管におしよどされる。気管から血管をつうじて血液中に窒素がはいる。そのため、めまいや息ぎれがおこる。そのうえイシキがもうろうとして運動まひになることもある。これがいわゆる潜水病である。しかし、クジラは潜水病にならない。空気中の酸素をすって呼吸するクジラが、長いあいだ海中にもぐつていられることを不思議におもう人がいるかもしれない。

16 マッコウクジラがふかくもぐれる秘密は、そのおおきな頭のなかにある。マッコウクジラの頭は、からだ全体の四分の一もある。マッコウクジラの頭のなかには脳油がたまっている。この脳油が長時間、水中にもぐつていられるためのセイリ的な役割をはたしているようだ。

17 このように、クジラは魚とおなじように水中生活に適応したからだのつくりをしているいっぽう、あくまでもヒトとおなじような哺乳類としての特徴をそなえているのである。そして、水中にすむ哺乳類として独自の形態や行動様式を発達させたのである。

(秋道智彌「鯨と日本人のくらし」人びとは鯨とどうかかわってきたか」より)

問一 線部①について、漢字の部分はひらがなに、カタカナの部分は漢字に直しなさい。

問二 文章中には次の一文が抜けています。どの段落の最後に続けられ

ばよいですか。形式段落番号で答えなさい。

問三 A D に入る最も適当な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

問四 線部①「気まぐれに海面にすがたをみせるとかんがえるのは正しくない。」とありますが、クジラが海面にすがたをみせるのはなぜですか。文章中から七字で抜き出して答えなさい。

問五 線部②「潮ふき」とはどのようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

問六 線部③「クジラの外形や内部の形態をみると、クジラが魚とちがう点

がはつきりとする。」とありますが、外形でクジラが魚とちがう点

はどのような点ですか。二つ答えなさい。

問七 X について、次の各問いに答えなさい。

(1) X に入る言葉を、文章中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

(2) 次の言葉が例と同じ関係になるように、①

例 X 進化

・強大		①
・義務		②
・赤字		③

問八 線部④「独特の尾びれのうごかしかた」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「独特の尾びれのうごかしかた」とは具体的に尾びれをどのように動かすのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 尾びれを左右に動かす。
I 尾びれを上下に動かす。
U 尾びれを前後に動かす。
E 尾びれを交互に動かす。

(2) (1)のように尾びれを動かすのはなぜですか。文章中から二

問九 I III に入る言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 視覚 I 触覚
E 味覚 O 嗅覚 U 聴覚

問十 線部⑤「クジラは……できる。」とありますが、同じ哺乳類であるヒトはふかく海にもぐるできません。ふかくもぐるこ

